



平成 29 年 8 月 31 日

船井情報科学振興財団

2015 年度 FOS 奨学生 鵜飼 貴也

Purdue University School of Aeronautics and Astronautics, M.S.

Massachusetts Institute of Technology, Ph.D.

海外大学院派遣留学 第 5 回報告書

気がつけば留学も 3 年目に突入し、FOS 奨学生としてもやや年長の域に入りつつあります。この半年間で公私共に様々な変化があり、2017 年の夏は大変充実しつつも須臾に過ぎ去っていきました。今回の報告書では、それらについて簡潔に振り返ってみたいと思います。

1. 中西部との別れ

2017 年 5 月、航空宇宙工学で修士号を取得し、Purdue 大学を卒業しました。授業や複数の研究プロジェクトの掛け持ちなどでややオーバーキャパシティ気味になってしまい、結局修士論文は書きませんでした。代わりに、必要授業単位数を満たすことで卒業できる non-thesis option を取り、なんとか無事に卒業した次第です。これまでの報告書でも書いたとおり、Purdue の航空宇宙の授業は project 参加型のものが多く、非常に面白い反面かなりのコミットを要求します。その中で研究を同時進行で進めるには自身のマネジメントを効率よく行っていかなければならず、それが上手くできなかったことはこの修士課程での大きな反省です。しかし、Purdue の指導教官と同僚と一緒に進めていた研究をなんとかまとめ、AIAA Aviation という航空系最大規模の学会で無事に発表することができたのは私にとってとても貴重で喜ばしい経験でした。航空宇宙は industry との繋がりが強く、学会では実務を見据えた応用的研究が多く見られ、刺激的な時間を過ごすことができました。

前回の報告書で述べたように、今回修士課程を卒業する前に幾つかの大学の Ph.D.課程に出願をしていました。まず、以下の4つのプログラムに出願しました。

- Massachusetts Institute of Technology, Aeronautics and Astronautics
- University of California, Berkeley, Mechanical Engineering
- University of Illinois, Urbana Champaign, Aerospace Engineering
- University of Washington, Computer Science and Engineering

結果的に、University of Washington を除く3校に合格し、最終的に MIT に進学することに決めました。

今回の出願は、Purdue でお世話になり何度も授業のプロジェクトや研究のことでディスカッションをして親しくなった先生や、共同研究を進めていた FOS の先輩の方さんからも推薦状を書いていただき、前回に比べてかなり万全な状態で臨めたと思います。MIT は、Prof. Julie Shah という Human Machine Interaction を研究している教授からの RA のオファー付きで合格でき、自身としても Ph.D.取得と夢の実現に向けてとても大きな一歩を踏み出せたように思います。

以前より進めていた小型飛行機のライセンス取得は、最後のチェックライドまで天候に恵まれず、結局 Purdue を卒業するまでに完了することができませんでした。これまで飛行した記録を残した log book があるので、今後 Ph.D.課程中に機会を見て取得したいと思います。中西部の空を離れるのはやや寂しいですが、街や海が広がるボストンの空を飛ぶのはとても楽しみです。



Purdue 大学の正門前にて

2. シリコンバレーで過ごす夏

Purdue を5月に卒業し、MITに入学する9月までの間に、西海岸ベイエリアにて夏季インターンをしていました。Bosch というドイツに本社がある自動車部品開発会社のシリコンバレー支部で、データサイエンス・ソフトウェアエンジニア職として働き、この夏の間非常に充実した日々を送ることができました。

インターンのポジションを取得するのは苦難の道程でした。航空宇宙関係はまず citizenship が理由でほぼ応募することができなかつたため、データサイエンス・ソフトウェアエンジニア系を中心にさざるを得なかつたのです。バックグラウンドがコンピューターサイエンスではないため、殆どの会社からはレジュメを送っても返事すら返ってこず、返ってきたとしてもそのほとんどが丁寧なお祈りの連絡でした。合計で何社に応募したかはもはや覚えていませんが、少なくとも 50 社 100 ポジション以上は出したように思います。その中から辛うじて1社だけ面接の連絡があり、こちらの会社との面接もコーディング試験も全てが初めてでわけもわからないまま受け答えをして、「ああ、まあこれはダメだろうな・・・」と思っていた矢先に採用の連絡をもらったのが Bosch でした。総じて、内部に知り合いがない会社に応募する場合、有利なバックグラウンド（今回の場合コンピューターサイエンス）やこれまでの就労経験がないと殆どと言っていいほど受からないということを痛感しました。

ベイエリアでの生活は大変刺激的でした。燦々と降り注ぐ太陽の中静かに居並ぶ綺麗で新しいオフィス、職場のキッチンで無限に湧き続ける珈琲やフルーツ、実務経験豊富な正社員の人たちとのアカデミックなディスカッション、仕事を円滑にすすめるための様々な便利なシステム、そして給料（！）。シリコンバレーですでに正社員として仕事をしている友人たちとも何度か交流する機会があり、同年代とは思えないほどの豪華な暮らしを目の当たりにし、自分の価値観を大きく揺さぶられることになりました。

この夏、ベイエリアでは毎週のように何処かに出かけ、全く飽きることなく充実の日々を過ごすことができたと思います。サウサリートやサンフランシスコでのショッピング、ナパでのワイナリー巡り、クパチーノのカラオケ、モントレイでのホエールウォッチング・・・2ヶ月半の間ひたすら遊び回ってもまだ全く足りないほどにベイエリア周辺でのアクティビティは充実しています。また Ph.D.課程中にインターンなどでなんとしても戻ってこようと決心した、そんな文字通り最高の夏でした。



ナパの古城ワイナリー、Castello di Amorosa

3. 虹色の旗をはためかせて

トランスジェンダーをご存知でしょうか。体の性と心の性がうまく一致していない人たちの総称で、私もその1人です。人によって度合いは異なりますが、私の場合体の性は男ですが、心の性が（なんとなく）70-80%ほど女性というトランスジェンダーで、日本ではXジェンダーという名前がつけられています。これまで日本で生活していた間は差別や中傷を恐れてひた隠しにしていたことですが、アメリカのリベラルな地域で生活しているうちにそれも馬鹿らしくなり、これからはオープンにしていくことにしました。

これまで私が経験してきたアメリカの大きな有名大学があるような街は総じて教育レベルが高くリベラルな雰囲気、トランスジェンダーを初めとしたセクシャルマイノリティの人たちにとってとても住みやすい環境になっています。Purdueにはまだありませんでしたが、MITの校舎内のトイレはその殆どが all gender restroom で、学問のもとの「全ての」性の平等を重んじる大学の姿が見て取れます。

ここで、短くですが一般的に私達の間でセクシャルマイノリティを説明するために用いる性の3つの軸の概念を説明したいと思います。

人の性には大きく分けて、

- 身体の性（生物学的性：男、女、両性具有）
- 心の性（性自認：男、女、中間、両方、無、不定、などなど）
- 性の対象（性的指向：男、女、両方、全部、無、などなど）

の3つの軸があり、この3つの軸上それぞれにおいてどの辺に位置するのかを考えることによって、多様な性の形を説明することができます。例えばトランスジェンダーでMtF (Male to Female) の場合、身体の性が男、心の性は女、そして性の対象は・・・人それぞれ、というようになります。巷でセクシャルマイノリティを指す場合によく用いられる LGBT (レズ、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー) という用語は、いわゆる1つのカテゴライズの方法に過ぎず、実際はそれらだけでは説明しきれないほど様々な性のあり方がこの世には存在するのです。

この学位留学は私にとって初めての独立した一人暮らしで、あらゆる生活の裁量が自由という人生で初の経験でした。周囲のリベラルな空気と自分を見つめる潤沢な時間に恵まれ、自分の性との関わり方を考え直す良いきっかけとなりました。今はファッションを自由に楽しんだり、周りの人との交流の仕方も少し変わって、最高に人生が楽しいです。留学を通して自分に起こった最大の変化は、間違いなくこの自分の性との関わり方だと思います。これからも、自分らしく快活に生きていきたいです。



サンフランシスコの街中にはたたく虹の旗

以上、この半年間の報告でした。これからまだまだ、恐らく4年ほどは Ph.D.課程の学生として留学生活を続けていくことになるかと思いますが、今後はより論文や学会発表など目に見える成果を多く残せるよう新天地でさらに精進していきたいと思っています。

2017年8月 鵜飼